

本学学生の保育実習・幼稚園教育実習における学びと課題  
— 実習事前指導・実習・実習事後指導を通して —

Hyogo College Students' Learning and Subject of Teaching Practice  
at nurseries and kindergartens  
— Based on before Guidance & Training,  
and After Guidance of Childcare Training —

前田 美智代\* ・三井 圭子\*\*  
黒崎 令子\*\*\*

(平成27年2月4日受理)

要約

保育科に入学した学生が、保育士資格・幼稚園教諭免許を取得するためには、保育現場での実習は避けて通れない科目である。本稿では、保育者を目指す学生の意識改革を求めることを目的とする。そのために、保育養成校としての課題と成果を明らかにし保育実習・幼稚園教育実習（以下教育実習）の在り方・方向性をまとめ今後の実習指導に繋げようとするものである。

キーワード：保育実習・幼稚園教育実習、実習指導

keywords：Teaching Practice at nurseries and kindergartens, Guidance of Childcare Training

## 1. はじめに

本学保育科では、学生が資格・免許を取得できるよう最大限のサポートし学習環境を整えている。実習に対しても学生の力量を見極めながら細やかな指導を行い、特に実習への心構えについて丁寧に説明している。

一人一人の学生が実習では学ばせていただくという謙虚さと、限られた期間内で多くのことを学びたいという意欲を持ち合わせて、実習に臨むことが何より重要であると考えている。子どもや保育者との生活を通して、小さな事柄にも心を止め、日々の実習を楽しみながら感動体験できることは幸せなことである。そのためには越えなければならないハードルが数多くあり、近年のように核家族化が進み、少子化と共に人間関係の希薄さの中で育った学生には、その複雑さや関係構築の難しさに悩み、戸惑うことが多いと予想される。コミュニケーション能力やメンタルヘルス面の弱さに加

えて、書くこと、読むことから遠ざかっている学生も少なくない。学生の悩みは計り知れないが、特に実習中は心と体をこまめに動かし子どもや保育者と共感しあえるよう努力を重ね、それぞれの実習が実り多いものになるよう願う。

## 2. 保育実習

ここでは、以下の内容で保育実習の学びと課題を鮮明にし、保育士養成の在り方を究明したい。

「保育士としての動機づけと資質向上の視点」

「第三部学生の実態・実習日程」

「事前指導の重要性」

「実習からの学び～総合考察」

「今後の課題」

### (1) 保育士としての動機づけと資質向上の視点

「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用

(\*まへだみちよ 保育科准教授 幼児教育・保育)

(\*\*みついつけいこ 保育科講師 幼児教育)

(\*\*\*くろさきれいこ 保育科講師 幼児教育)

能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする<sup>1</sup>とある。保育士資格を取得しようとする本学の学生も、この目的に則り現場実習を行う。また、実習に行くまでの実習指導(事前指導)で如何に学ぶかによって現場実習の学びに大きな影響を及ぼすことは、言うまでもない。保育士を目指す学生の志望動機としては、「子どもが好き」から始まり「子どもの成長を間近で見ることができ生きがいを感じる」等々、となっている。学生により、多少の温度差はあるが、少なくとも入学時は保育士を目指す気持ちは全員持っている。

ところが最近、時間の経過とともに、当初の夢の実現をあっさりあきらめてしまう学生が増加している。このような状態の学生が保育士を目指すという確かなマインドを持ち、精神的な自立を図っていくための手立てを講じるのが保育士養成校としての本学の大きな課題であるとする。学

生はこれまでの生活を見直し、意識変革が求められる。一方実習担当者は、学生がどこでつまづき何に悩んでいるのかを探る必要に迫られる。いろいろな側面を持つ学生ではあるが、実習をして初めて理解できることや納得できることも多くある。実習に行って大きく自己変革する学生もいる。逆の場合もあるが、一人一人の学生が貴重な実習の機会を保育士資格取得の第一歩として受け止め、主体的に実習に取り組み、さらに保育士としての資質向上心を持つよう期待する。

## (2) 第三部学生の実態・実習日程

本学の第三部生は、短期大学生であるが3年間学ぶカリキュラムになっている。授業は基本的には午前中である。第三部生の保育実習の日程は次の通りである。(図1参照)

1年生の11月に見学観察実習として10日間、3年生の8月下旬から10日間は参加指導実習を行

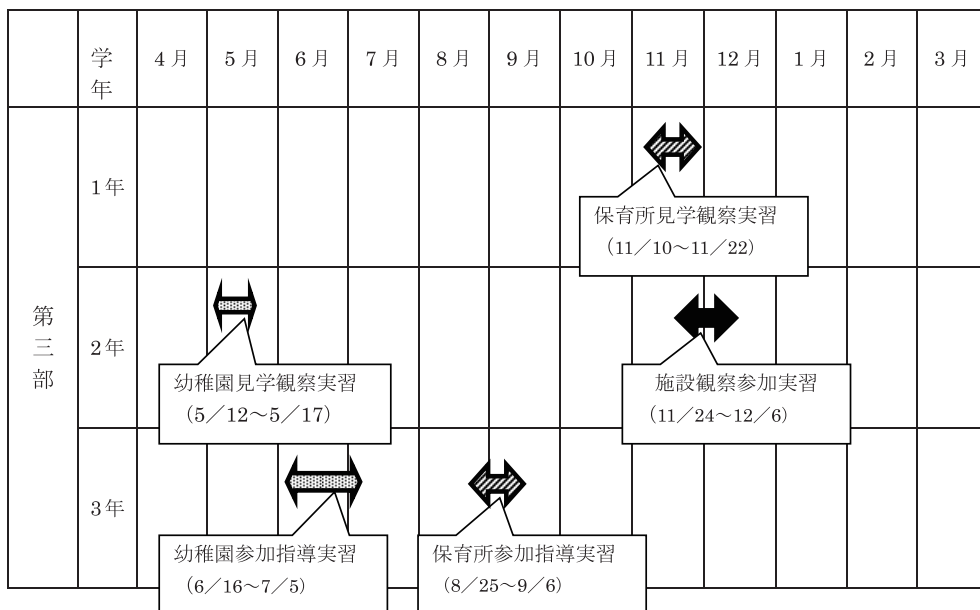
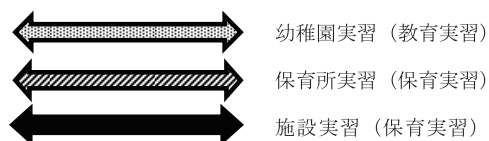


図1) 第三部の実習日程



う。基本的には1年生の時に見学観察実習を行った保育所（園）で3年生でも参加指導実習を行うことを原則としている。

見学観察実習から参加指導実習までの期間には時間的なゆとりはあるが、その間に教育実習・施設実習が入っている。学生は1年生の時から、自ら目標を設定し課題意識を持って日々の学びを確実にしなければ実習そのものが大きな負担になってしまう。しかし、現実には厳しく計画的な準備は、なかなか捗らない実態である。図1で見ると、入学直後が比較的実習の重なりが少なく、この時期に保育実習指導（事前指導）を行う。保育実習指導では、実習の意義、保育実習の目標、保育実習の方法、保育実習の心構え、保育実習の事務手続きと諸注意等を学ぶことになっている。この期間に学生は、具体的に次のようなことを学ぶ。⑦乳幼児とともに生活しそのかわり方や乳幼児への理解を深める中でいろいろな気づきを身に着けることを習得する。④実習ノートや指導計画のように文章で表現したり更には子どもへの表現方法を工夫したりすること等々である。

実習の全容についての基礎的な知識・技能を短い時間の中で学び取らなければならない。

「保育業界の忙しさや常識、更には言葉遣いや立ち居振る舞いについてまた、学生が最も苦手とするであろう不自由さや窮屈さについても事前に指導しておくことは、後々のために大変有効である」<sup>2</sup>と記されている。このことは本学でも基礎的要素として学んでおくべき必要不可欠な事として受け止め、保育者の資質向上の足掛かりになると確信している。

### (3) 事前指導の重要性

#### ①実習先探索から依頼へ

学生は実習に向けて様々な作業を始める。

1年生は、まず実習先を自分で探すところから始める。自分の出身園へ依頼する学生、居住地に近い園に依頼する学生。また、保育内容で依頼する学生もいる。いずれにしても学生は、実習依頼に四苦八苦ししながら期日までに何とか承諾を得るところまでこぎつける。実習依頼は教員や実習事

務室で依頼をする方が円滑に進むが、本学では実習は実習依頼から始まると位置づけている。学生にとっては実習をより身近に受け止めることができ、主体的に臨めることを期待してのことである。この作業を通して学生が保育士を目指す確かな動機づけ・意識づけの一助になると考えている。

#### ②保育内容に関する準備

3年生になり、参加指導実習時期になると各自が何をどう準備すればよいか、優先順位を決めて計画的に行動することが求められる。そのために次の様式に書き込みながら不足分を考える機会にする。（表1参照）この作業を通して、実習までの努力目標が定まり具体的に勤しむ姿が見られるようになる。今回は、各自が選んだ絵本を互いに読みあい、点数化する。互いに良い点や今後直した方が良いと思われる事柄を出し合う。この方法は、どの学生も真剣に取り組んでおり実りが多い。

#### ③保育現場のイメージ作り

毎回の実習指導の授業では、保育現場の具体的な様子を講義や視聴覚教材を利用して伝える。また、手遊びや歌遊びなどの実技・演習をとり入れながら、保育実習へのイメージ作りをしていく。

保育者を目指して入学してきた学生とはいえ、イメージトレーニングの乏しい学生にはこの授業が苦痛になることもあるので、できるだけ理解しやすいように努めている。絵本読みや手遊びをすることを、恥ずかしがったり自分には出来ないと自信喪失してしまったりする学生も少なくない。叱咤激励をしながら、学生の意欲をかきたてる。3年生になって弱腰ではとても参加指導実習は乗り越えられない。幸い本年度は実践教室も充実し、学生は、この教室を利用して模擬保育を行う。また、環境構成の一環として実践教室に壁面制作を施し、実習先での保育室が具体的な形でイメージできるようにしている。また、学生同士で保育者役をこなしたり、子ども役を担ったりしながら模擬保育に専念する姿も見られる。環境構成の良し悪しや保育者の子どもへの言葉のかけ方・子どもへの働きかけについても少しずつ体得できるよ

表1) 事前に身に付けておくべき実習内容予定

種 類	1	2	3	4	5
ピ ア ノ 曲					
絵 本					
手 遊 び					
手遊び以外の遊び					
ゲ ー ム 等					
製 作					

うになっている。そして、授業の中盤以降は、模擬保育や実習ノートの書き方、更に指導案の書き方等実践的な内容が増える。

#### ④実習課題の設定～実習の振り返り

この項ではA実習課題の設定（2～3項目）2014.7第三部3年生57人、B実習課題を通して実習を振り返る2014.9第三部3年生57人、C総合考察を実施した結果について説明する。

A実習課題設定については、㉗子どもとのかかわりからの学び。㉘保育士からの学び。㉙保育（所）・園の機能や環境から学び。㉚実習生としての心構え等々<sup>3</sup>。（百瀬ユカリ著よくわかる保育所実習創成社）を参考にして作成をする。当然のことながら、学生は毎日、顔を合わす子どもや保育士とのかかわりを重視していることが図2から感じ取れる。保育所（園）全体の使命・役割・機能等、保育所（園）の全体的な姿についても課題を持ってほしいと感じる。

B実習課題を通して実習を振り返る部分では、学生は実習が始まると、緊張と不安で掲げた実習課題は、置き去りになることもあるが実習終了後の「実習を振り返る」というテーマ（自由記述）でレポートを作成すると図3～図5のようにより具体的な課題や反省を得ている。図3～図5では多い順に掲載しているが、例えば子どもからの学びでは、「状況判断を的確にするには」や「声をか

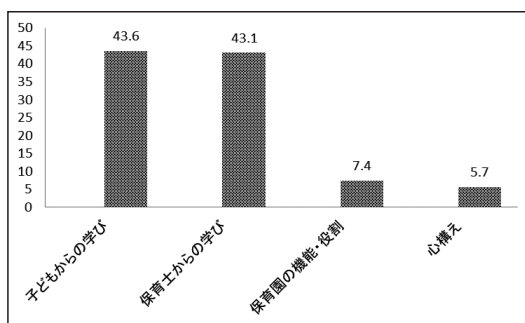


図2) 学生が設定した実習課題 (%)

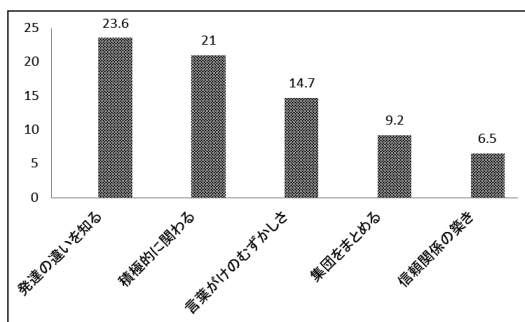


図3) 子どもからの学び (%) 上位5位

けるタイミングを逃す」などもある。保育士からの学びについても「責任ある保育士の行動とは」や「楽しい保育はどうすればよいか」、「自分の得意分野を生かすなども学校でも学んだが」なども少数意見ではあるが実習生としての切実な思いも窺える。詳細についてはCの総合考察で述べる

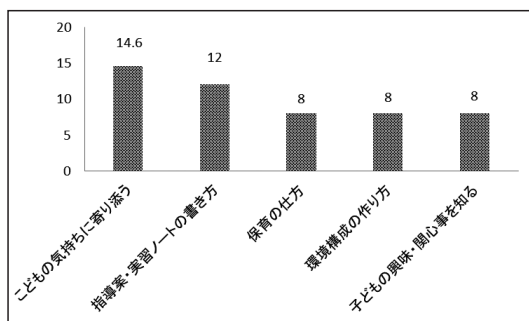


図4) 保育士からの学び (%) 上位5位

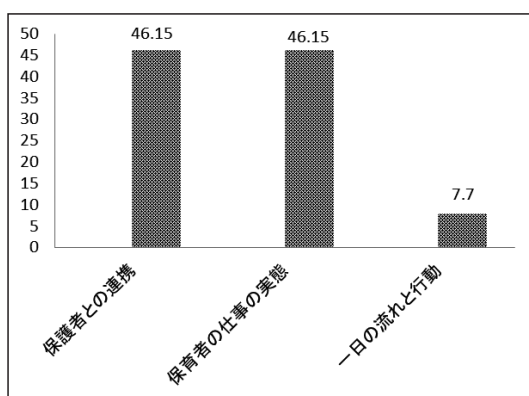


図5) 保育所(園)全体の機能 (%)

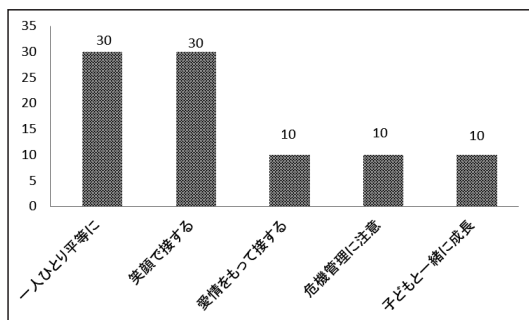


図6) 心構え (%)

が、実習に行く前とは意識は変化していることを感じる。

#### (4) 実習からの学び～C総合考察～

##### ①具体的なやり方を知りたい。

学生は実習課題を掲げ、実習に臨んだものの、課題解決に至らないことも多々ある。しかし、多

くの学生はこれまでの授業の中では学びきれなかったこと等も学んできている。図3の子どものからの学びの中で「言葉がけのむずかしさ」の項目に視点を当てると、この課題は多くの学生の悩みであり課題である。実習でも上手くいかなかったとある。言葉がけについては、コミュニケーションの苦手な学生も少なくないのでその悩みは、深かっただろうと予想できる。「言葉がけがうまくいかないとは、言葉が子どもに響かないということだろうか。子どもに響く言葉、届く言葉、聞いてもらえる言葉とは、おそらく子どもと接点がある言葉であろう」<sup>4</sup>とある。学生は、どんな言葉を言えばよいかというような考えに至ったようである。そうではなく、子どもと接する中で思わず共感したり、励ましたくなったりする言葉こそが子どもへの言葉がけが上手くいくということではないだろうか。子どもと接する中でとはいうものの、必ずしも子どもは、他人に分かりやすく言葉で言ったり、表情で表したりするとは限らない。保育士は、その分けにくい子どもの部分を理解する洞察力が求められる。つまり、感性が問われるのである。学生がそこに至るには時間と経験が必要なのだろう。

また、多くの学生の切実な課題であったのではないかと感じるのは図4の「保育士から学ぶ」の中の保育の仕方・環境構成の作り方である。その具体的な中身は、どんな歌を教えたらいのか、子どもが好きな遊びはどんな遊びか、保育室の環境構成や保育所(園)の環境構成はどのように作られているか、制作や絵画の材料や書かせ方、作り方、どんな絵本を読めばよいか等々と推察する。つまり具体的なやり方・保育方法を知りたいということが大半の学生の思いである。その思いは、日々保育をしなければならない実習生としての切実な願いであり、実習生がそれを求める気持ちは理解できる。ただ、それがマニュアル化してしまうことを危惧する。本来、保育・教育は創造的な作業であり担当する子どもの実態に即したものが望まれる。

「保育者はどのように子どもの育ちを援助し指導し、共に過ごす幼児の姿から幼児理解を深め、

幼児の発達に必要なものは何かを考えて環境構成をする」<sup>5</sup> とあるように、じっくりと子どもと保育士がどのように関わっているのか？また、子どもが楽しそうな表情をしたのは何故なのかを考えられるようになってほしいと思う。そこを学ぶことによって、保育所（園）の機能や保育士の使命・役割を鮮明に深く学ぶことができるのだと感じる。学生の反省等を聞く中で、何をどのような方法ですればよいのかという直截的に考えることが多い。もう一步進めて子どもの成長発達とどうかわるのかという原点のところに学びの軸足を置くよう指導する必要があったと反省している。

## ②子どもの見方・保育士の視点

事後指導の討論会では次の内容が、各グループから発表された。（実習の振り返り）

### Aグループ

- ・事前準備の大切さを教えていただいた。（準備しすぎてもいけない）
- ・子どもへの説明は簡潔に。
- ・遊びには指導が必要。そここのところをしっかりと考えるよう指導を受けた。

### Bグループ

- ・低年齢児には支えること・瞬間的に励まし達成感を感じとらせる。
- ・ピアノは、十分練習したがスピード等子どもに合せるのが難しかった。

### Cグループ

- ・低年齢児のトイレトレーニングや生活習慣はその都度、声をかけて馴染ませる。時間をかけてそれぞれの子どもの力にする。

### Dグループ

- ・一人一人を見ながら視野を広げる。立っているときと座っているときは、子どもの違う姿が見える。

### Eグループ

- ・指導案は細やかに書かないといけないが、子どもの前では臨機応変に。
- ・子どもとのかかわりでは発達の違いに注意することができなかった。

### Fグループ

- ・子どもの行動の意味をつかむ大切さを学んだ。人間関係を作るのは、良し悪しの基準ははっきりしていることと学んだ。

### Gグループ

- ・遊びに入る前の遊びの説明は、子どもに難しいと思わせてはいけない。
- ・自由遊びでの言葉がけが少ないと言われた。

### Hグループ

- ・環境構成について、年齢にあった環境構成や季節感を大事にする環境構成の在り方などを教わった。

### Iグループ

- ・予想外のことに遭遇したときにパニックになってしまった。
- ・いろいろな場面を想像して、計画を立てなければならぬと思った。

以上のグループ発表を聞くと、どのグループも、重要な学びをしている。子どもの見方が理解できると接し方に工夫がみられる。保育士の視点に少し近づけたのではないかと感銘した。このように、保育士の専門性に関する内容を把握できたことは、大きな成果である。

## (5) 今後の課題

実習では、これまでの生活から想像もつかないような経験をした学生も多かったようである。人が人を指導する、保育・教育をするという厳しさについてはどの学生も学んできたことが窺える。学生の学びや課題を今後の実習指導に生かすために多方面からまとめておくことが重要であると考え、ここで学生の反省等を次の視点で考察する。

### ①指導方法は適切であったか。

実習先で実習生とは言い指導力を求められることがある。学生は実習前に色々な手遊びや絵本の読み聞かせ、ピアノ練習等々一生懸命マスターしている。しかし、遊びの一つ一つをマスターできてもそれは指導力になりえない。子どもにどう伝えるか、子どもが納得したり楽しんだりするためにどのように工夫したり想像すればよいのかを問

われる。保育士は子どもの前に立った時、この視点で保育を考えなければ指導力があるとは言い難い。そして、保育士は全力を注いで子どもたちに向かわなければならないのである。学生にとっては困難をきたすことであるが、このことも十分伝える必要がある。

## ②幼児理解の不足はなかったか

幼児理解についての考え方は様々である。ある園では、年齢・月齢による発達の過程を知っておくことが重要であると教えられる。その通りであるが、幼児が何かができるようになるといった外面的なとらえ方だけではなく、表には映りにくい内面の理解こそが必要と感じる。「目の前にいる一人一人の幼児と直接触れ合いながら幼児の言動や表情からその幼児の良さや可能性、発達する姿・心の動きなどを受け止め、理解しようとすることを指している」<sup>6</sup> とある。この資料は、少し古い資料ではあるが精神は、そのまま受け継がれている。しかし、学生にとっては最も苦手な部分ではないかと想像するが、こうした考え方があることも周知徹底すべきであった。

## ③学生自身の生活経験・自然体験不足の影響は？

「自らの成育歴において乳幼児との関わりを含めた、豊かな生活経験や自然体験などの不足が指摘され、保育の基本的な専門性の育成の面でも困難な問題がある。」<sup>7</sup> と記されている。

本学でも保育士を目指す学生が幼少の頃に遊んでいた遊びについて簡単な調査をした。

身近な自然遊び、室内遊び、戸外遊び、保育の中で教えてもらった遊び、よく歌った歌等について調査した。「身近な自然遊び」では59人中まったく白紙は4人いる。

経験がなかったのかまた、あまり外遊びをしていない生活、つまり室内でのゲーム遊び等に講じていたとも推測される。また、幼少時に身近な自然と触れ合っておくことは、人格形成上、大きな役割を果たすことを幼児教育者が次のように記している。「自然は手を伸ばして子どもを呼び込めない。花はそこに咲いているだけ、小虫や魚は、

ただそこに生きていただけなので遊ぶとすれば子どもの側から働きかけなくてはならない。かくして自然の事物や事象との交わりや遊びは、子どもに自発させる訓練をしてくれ、また主体的に遊ぶ対象である。」<sup>8</sup> とある。

身近な生き物とのやり取りの中で、死生観が養われたり、思い通りにならないことがあることを知ったり、その中から道徳性が生まれたりするものと理解する。保育士になろうとする学生には身近な自然体験をして子ども観・保育観を豊かにし、人としての生活の仕方を学び子どもに伝えてほしいと願う。

## ④遊びのレパートリーは少なくなかったか

学生には、多くの遊びを用意するように伝えている。授業で会得できるのは限られているので、後は各自の自覚に委ねることになる。学生によっては参考資料を求めて多くのレパートリーを準備している。ここでの差は、実習先でも良さとして出ている。うまくできたということではなく、一人一人の自信が違ってくる。巡回先で好評価を得た学生は、遊びのレパートリーを増やし努力し準備万端で臨んでいる。毎回、伝えてはいるものの、伝えきれていないことも大きな反省点である。

## 3. 教育実習

幼稚園教育実習は、見学観察実習1週間、参加指導実習3週間を実施する。

保育科三部について述べる。

### (1) 見学観察実習について

第三部においては、2年次で見学観察実習の1週間を附属加古川、須磨幼稚園でお世話になる。

クラス編成をされている幼稚園で、1クラスに実習生5～6人での実習で、担任の先生方には負担をおかけしている現状である。

幼稚園の生活を知り、3歳児以上の子どもたちと遊び、子どもへの理解を深める。

1週間という期間で、短いようだが、丸一日を幼稚園教諭としての経験を味わわせていただく。その一日が、しっかり体調管理をしないと、最後

まで勤められないことも、経験する。一人ひとり子どもとかがわりながら、全体の活動も把握していく。担当教諭の動き、思い、保育のねらいを読み取りながらの、1日の記録もしていく。その時期の子どもの遊びとその月の計画的な保育の流れの中の1週間という意識を持つ。幼稚園の1日の生活を知り、保育の展開を学び貴重な時間を過ごすのである。

また、瞬時に自分はどう動くか、子どもの話しかけにどう答えるか、子どもへの語りかけをどうするか、子どもの動きは一瞬たりとも見逃さないことが要求されるのである。

保育を見せていただく立ち位置、子どもが遊んでいるのを見守る位置、1つ1つが勉強であり、自分で判断して行動していくのである。

三部学生は、保育実習を1年生(Ⅱ期11月)のときに体験しているはずだが、幼稚園と保育園の違いへの実習の戸惑いはある。しかし、それを実習での学ばせていただきたい事項の上位を占める。

幼児教育を進める幼稚園では、はっきりと指導が入るという意識を持つのである。幼稚園の1日の保育の流れの中で、自由遊び、主活動、クラス活動の中にねらいが明確に指導計画に示されているのである。見守り支えながら、指導する要素が入ってくる。

生活、遊びの中の教育を考えながら、教師としての実習となる。

現在、保育園でもしっかり幼児教育をしていく時代になり、どの部分が幼児教育なのかの捉え方、考え方の違いはある。

3歳児、4歳児、5歳児などは自分自身の言葉で、はっきり言い、実習生にかかわる子どもたちである。してもらうことよりも一緒に遊ぼうとし、子どもたちにどう接していくかが、実習生の学びになると同時に、実習での幼児理解につながる。

ただ見ているだけでは、対応ができない。色々なハプニングが起り、そこで保育者の対応を必要とするのである。人対人のかかわりを学ぶのである。

担任は保育を進めている、常に子どもとかがわりその姿から何を感じ、何を学び、何を自分自身に身に付けるかを実際、敏感に感じることである。ゆえに目的意識を持つということが必要となる。1週間の実習であるが、実習生本人の捉え方で得るものは大きい。

実習事後指導の授業の中で、学生自身の自己評価しながら、今後の実習に繋げるために、課題を考える。

3年間のそれぞれ学生の自ら感じた課題をまとめてみた。

## (2) 見学観察実習の課題からの分析

この表2からは、その場に応じた言葉がけ、行動、支援の不安が1番多く、積極性に欠ける、保育技術のレパートリーが少ないと続く。そこから分析すると、下記の通りである。

- ・小さな子どもとのかかわりの不足
- ・幼児理解ができていない
- ・コミュニケーション力の不足
- ・瞬時の対応、臨機応変に行動ができないし対応に迷う。
- ・予測、推測ができてにくい。
- ・見通しを立てることができてにくい。
- ・積極的に行動ができないし、働きかけができない姿が見られる。
- ・保育の技を知らない。

経験の不足と心構え、準備不足であろう。

学生は、高等学校時代に、保育コースを選んでいる場合は、年に何回かの保育体験をしている。

しかし、それはわずかな日数である。また、中学時代にトライやるウィークで1週間の保育体験をしている。それは子どもと遊ぶ経験で、保育をすところまではしていない状態であろう。子どもと会話するところから、つまづきがあり、子ども同士のトラブルに遭遇した時がより戸惑いも大きい。

学生自身の小学生、中学生の時代に、どれだけ、異年齢の仲間と遊びを経験しているか、小さい子どもの扱いなど身をもって体験しているかであろう。



表2) 見学観察実習の課題

%で表示

	項 目	2012年	2013年	2014年	3年間の平均
1	その場に応じた言葉かけ、行動、支援ができない	41.77	40.00	31.25	37.67
2	子どもの一人ひとりの受け止めができない。	8.86	4.29	7.81	6.99
3	喧嘩の仲裁と対応の力不足	5.06		7.81	4.29
4	子どもとのかかわりの不安	2.53	1.43		1.32
5	子どもをまとめる力不足		1.43		0.48
6	保育技術のレパートリーが少ない	3.80	2.86	10.94	17.60
7	事前学習、準備不足	1.26	7.14		8.67
8	保育者としての言葉使いができていない	6.33	10.00	9.38	8.57
9	見通しを持ち、計画的にできなかった。	1.26	8.57	3.25	4.36
10	絵本の読み聞かせの練習不足	3.80	1.43	7.81	4.35
11	全体を見ることができない	5.06	2.86	1.56	3.16
12	状況判断と瞬時の対応の力が不足	5.06	4.29		3.12
13	ピアノができない	3.80	2.86	1.56	2.75
14	保育の雰囲気づくり、流れを作ることができない			3.13	1.04
15	表現力が無い			3.13	1.04
16	年齢に合わせた遊びを考える力が不足	1.26		1.56	0.94
17	見極める力が足りない			1.56	0.57
18	子どもの目線の立つことができない			1.56	0.52
19	保育の導入ができなかった		1.43		0.48
20	安全への配慮が足りない	1.26			0.42
21	積極性に欠ける	11.39	8.57	23.44	14.47
22	体調管理ができない	2.53	14.29	6.25	7.69
23	実習ノートがかけない	5.06		4.69	3.25
24	指導者の動きを観察する力が弱い		4.29	3.13	2.47
25	自信が無い			1.56	0.52

1年生での保育実習を経験しているが、保育園と、幼稚園の違いを感じつつ、まだその経験が活かされていない傾向にあるのではと思う。言葉がけというが、言葉よりも、どんな風に対処したらいいのかかわからない。喧嘩を止めなくてはと思い、命的に言ってしまう、またすべて否定をしてしまう。

その場の子どもを受け入れることから始めなくては、教育にならないのである。原因を見極める、どちらの子どもにも言い分がある、冷静に時間をかけて対応する、そのかかわりが大切なのである。

しかし、それまでにしっかり子どもの姿を見る、子どもを知ることがなくてはならない。その現状にあたふたとしてしまうのである。

子どもを知ることが、1週間の見学観察実習の目的なのである。しかし、実習という違った環境

の中で、にぎやかな、小さな子どもたちが相手の実習で、右往左往の状態が1、2日続く。自分がどう動いたらいいかわからないまま、あるいは、一人の子どもと夢中に遊んでしまう。全体が見られない状態があり、気付いたときは4、5日と経ってしまっているのが、現状である。

見学観察実習ではあるが、ただ見ているだけ、観察しているだけでは実習ではないのである。子どもと遊び、かかわるのである。

朝から夕方までの1日の実習はたとえ1週間であつても様々なことが起き、色々なことを体験し、充実した実習になる。

そこには、観察記録の実習ノートがある。

帰宅後振りかえりがあるため、1日の保育の内容を改めて記録し、自分の行動も思い浮かべながら、指導者であるクラス担任の言動から、考えや

思いを推測しながら記録していくのである。翌日に指導者に提出し、記録を見ていただき指導を受けるのである。反省会も実習園では持っていたが、指導していただいた事のみ記録し、本人の考えたことまで記入に至らない事が多い。そこで、実習事前指導として実習記録の書き方の指導が重要となる。

1日1日の記録の中に、一番印象に残った子どものかかわりを記述するページがある。そこに自分自身の行動、子どもへの言葉がけ、かかわりが本当によかったのか、反省や課題が生まれる。その場の子どもの思いにも、心が寄せられることであり、次へのステップになる。文章力が弱くなっている今日の学生たちが、苦勞する実習の記録である。様々な教科の中で、文章を書く機会を多くし、見たこと、聞いたこと、感じたこと、助言されたこと、考えたこと、推測したこと等が文章化できるように、普段の学習態度が重要となる。

### (3) 参加指導実習

見学観察実習を終えて、三部3年生になって6月に実施する。

部分保育・研究保育・全日保育等が3週間の実習の中にある。

実習の中で一番長い3週間の期間である。見学観察を終え、今度は保育に参加し、指導の機会が多く与えられる実習である。

#### ①部分保育について

一日の保育の流れの中で、30分位の時間をいただき、実習生が、子どもと共に楽しめることをする。絵本の読み聞かせ、歌遊び、手遊び、ペープサート、ゲーム遊び等、短い時間内で、実習生がリードして、保育を進める。

幼稚園はクラス編成であるため、20人～30人の1クラスの子どもたちに保育をする。一人で保育を進める。指導計画を作成して、担当者に指導を受け1週目から保育に参加させていただける場合もある。突発的に、担任から保育をやってみなさいといわれることもある。

2週目からは、自由時間に子どもと遊ぶ事とは

別に、毎日、時間をいただきながら、子どもに向き合い保育をする。これが部分保育である。

3週目には、毎日保育に参加する。しっかりとねらいを持ち、内容を考え、指導案を作成し、保育に臨み、園長、主任担任の先生方に、指導を受ける、後で述べるが、研究保育がある。

#### ②全日保育について

全日保育とって、一日中保育を任されることがある。全実習園ではない。3週間目に1～3日間の実習をさせていただく。1日の指導案を立てるのである。

朝の子どもの受け入れから、保育の展開、給食(弁当)の準備、降園準備から、保護者の迎えまでの1日中、担任と同様の仕事を任されるのである。クラスの子どもたちと遊び、保育をするのである。生活全般を見守り、援助しながら、保育内容を考え教材や内容の事前準備をしながら、その一部に研究保育もある。

#### ③研究保育について

事前指導の中で、その時期の子どもたちの遊びを考えながら、学生自身がしようとする保育の内容を検討し、指導案の準備等を早く用意することを伝えるが、それが中々できない。

運動遊び、ゲーム遊び、歌唱指導、造形、制作、絵画、自然物を取り入れた遊び等、学生本人が、得意とする事、様々な保育を教科書はじめ、保育雑誌等を参考にして、指導計画を、実習が始るまでに作成し提出を促し、添削し実習に備える。実習が始まればどうにかなると安易な考えで、実習に臨むものもいるなど中々実行に移せない現状がある。

授業の中での、資料配布、模擬保育など時間の限りが在り、図書館等で調べるなり、学生本人の意欲、やる気の問題である。

実習とは、『学生の発想と生活』から『保育者の発想と生活』への転換が必要である。その実習の中で、子どもとどうかかわり、ことばをかけ、自分なりの保育を進めていくか、実際の保育現場で、実習園の教師から学び指導を受ける<sup>9</sup>。と言われ

ている。

実習園での評価は、この研究保育が重要な評価対象となり、学生の保育者としての資質、保育の技を見ることとなる。ピアノを不得意とする学生は、ピアノを避けての保育になる。

しかし実習園の指導者はしっかり見抜いている。評価の中に「ピアノをがんばりましょう」とコメントがある場合が少なくない。

実習巡回指導に行った場合、よく研究保育を見てくださいと言われ、実習生の保育を見る機会がある。

指導していただいた指導案を見ながら、40分～1時間ぐらいの保育を参観する。

教材準備はしっかりしているが、保育の導入、展開、最後の締めくくりと保育が進むうちに時間がかかり、子どもの集中が続かない。時間配分と保育内容が年齢に合っているかどうかである。四苦八苦しながら、担任に助けていただきながら最後まで保育を終わる。

3週間目の研究保育の事が、実習後の自己評価に、重要な位置を占めているのである。

後の反省で涙するものもあり、できなかったと落胆する姿もあり、大変さを実感するよい経験となる。大学では見せない学生の姿があり驚きもある。やる気で望んでいることが、今後の実習や現場に出たときに繋がる。

その研究保育の内容の1位は、「制作をする」である。70%の学生がこれを研究保育とし、指導計画を立て保育に臨んでいる。

次に2位は「ゲーム遊びをする」25%で、しほ取り、フルーツバスケット、じゃんけん列車等である。

この保育をしたことが自分の保育する力を考える上で大きな割合を占めている。

事後指導の中で、学生自身が自己評価をする。それと自分自身にどのように保育する力を付けるべきか、今後の課題も出てくる。

#### (4) 参加指導実習の課題からの分析

参加指導ということで、クラスの子どもとかかわり、保育をさせていただく機会が多くある。指

導者と同様に、そのクラスの保育者としての振る舞いをしなくてはならない状態になる。

表3の項目1～5はこどもへのかかわり、項目6～11、保育をする事への課題、次に項目12～18は、保育者として、実習生としての課題である。

幼稚園の1日の生活、保育の流れで、学生自身が子どもにかかわり、保育を進めることが多く、そこにいくまでには、指導計画の作成、教材準備、保育の流れのシミュレーションをする。指導計画の中で細案といって、保育の導入への子どもの言葉がけ、子どもの反応を予測し事細かく記入し、自分の指導計画とする。

指導計画作成する時点で、教材研究の事前準備は十分している。しかし、保育に入ると色々なハプニングが生じ、対応できなく戸惑い、時間がかかる保育になってしまう。

予定している保育時間を大幅にオーバーする事が3位である。1位の子どもへの言葉がけ、かかわりはやはり、制作物の説明が、全員の子どもたちにわかりやすく説明ができないまま、保育を進め、子どもを戸惑わせてしまい、手に負えなくなってしまうケースである。

年齢に合わない制作物であったりもする。幼児の制作は個人差もあり、時間がかかり、個人指導を必要とする保育である。どこまで子どもがするのか、どこに教師の援助を入れるのか、十分に準備が必要になる。

そこで教材研究を欠かせないのである。制作の手順を子どもに合わせてしていく方法が保育の技になってくる。

研究保育の反省と指導者からの指導助言で、多くの学びがある。それが、3週間の参加指導の学びでもあり、自分自身にどれだけ保育する力がついたかを振り返るのである。

表3は学生が自己評価しながら文章で表し、それをまとめたものである。

#### (5) 保育力の分析と考察（2年分の結果）

表4は学生が実習でどんな保育力を付けるべきか、実際についたのかを述べている。保育力を自由記述としての文章で表したものをまとめた。実

表3) 参加指導実習を終えての課題

%で表示

項 目	2012年	2013年	2014年	3年間の平均
1 子どもへの言葉かけ、かかわりの不足	10	10	27.69	15.90
2 トラブルへの対応力の不足	2	4.29	1.54	2.61
3 状況に応じた言葉かけ、判断ができなかった		8.57		2.86
4 全体を見る、全体の把握する事が弱い		2.86	3.08	1.98
5 細かい配慮ができなかった	2		4.69	1.56
6 指導計画、指導内容、準備不足であった	14	12.86	20	15.62
7 保育の進め方、時間配分が適切でない	10	17.14	13.85	15.33
8 積極的な指導ができない。	12	10	7.69	9.9
9 保育内容の充実と活動の発展ができなかった	8	7.14	4.62	6.59
10 落ち着いて指導ができない	2	10		4
11 環境構成の配慮に欠ける	2	1.43		1.72
12 実習ノートの不備。誤字、脱字がある	14	2.85	4.62	7.16
13 子どもの発達段階の理解不足	4	4.29	10.77	6.35
14 保育者としての言葉使いができない、自覚が無い	4	8.57	1.95	4.84
15 体調管理ができなかった		4.29	3.08	2.46
16 頑張りが認めてもらえなかった	2			0.67
17 指導者との会話不足	2			0.67
18 自信が無い			1.54	0.51
19 ビアノの練習不足			1.54	0.51

際現場でのプロとしての保育の力はもっと多くある。

しかし3週間学生なりに必死で実習に臨み、振り返って考えたのである。

やはり、子どもとのかかわる力と、会話力、どのような場合でも、判断をして対応ができる。そのことが実習で、学んだことである。年によっては下位の順位は本当にまちまちだが、人それぞれ感じた結果である。

まだまだ未熟な学生たちが、人として、保育者として大勢の子どもたちの前に立って、苦労しながら、保育の場で、肌を感じた結果でもあろう。

保育者として、オールマイティーの専門性を求められ、それは、実際現場に出ての、子どもとのかかわり、コミュニケーション力、幼児理解、観察力、洞察力、積極的な行動、瞬時の判断と対応、保育の技、指導計画の作成力、見通しを持った計画性、常に笑顔で、優しさと愛情を持ち、感性を研ぎ澄まし、表情豊かで、情緒が安定し、広い心と余裕を持ち、視野の広い、知識が豊富な保育者でありたい。

それは、3年後、5年後経験を積んで、日々、

自己研鑽をして、理想の保育者に近づくのである。

そこで、意欲をもって、取り組むよう、養成校として、様々な角度からヒントを与え、各自が学習し、研究し、技を磨く機会を十分できるように後押ししていきたいものである。

学生本人やる気で、実行に移すしかない。技術は毎日毎日の鍛錬の中にあり、絵本の読み聞かせも練習しないとできないのである。実習に行く間際になってするのは遅すぎるのであるが、現実には準備不足の学生が多いし、始まって気付くのである。三部の学生は特に、就労している学生が多いので、その準備時間をつくり出すのに苦労する。わかっていてもできない状態もある。

実習の前に、どのように保育力をつけるのか、学生が意識して、すべての保育科の教科を実習に反映させ、連動していくことである。実習に必要な指導計画の書き方、実習記録の書き方、保育の進め方の模擬保育をし、保育の技を身に付けるように進めることは、すでに行なっている。

限られた授業の時間だけでは技は身につかないのである。そこに学生の努力と、少しでも時間を作って取り組む姿勢が必要となる。必ず努力は実

表4) 保育力についての意識

%で表示

	項 目	2013年	2014年	平 均
1	一人ひとりに合わせた言葉がけができる	21.54	34.29	27.91
2	対応する力（トラブル、保育の流れの中）	13.85	15.71	14.78
3	子どもの発達を知る（幼児理解）	12.31	7.14	9.73
4	子どもを受け入れる力	6.15	2.86	9.01
5	全体を見る力	6.15	4.29	5.22
6	認める、褒める言葉をかける	6.15	2.86	4.05
7	子どもが集中できるようにする	6.15	1.43	3.79
8	子どもと一緒に楽しみ、工夫する	6.15		3.08
9	指導案の作成	3.08	2.86	2.97
10	落ち着いて向かう		5.71	2.86
11	観察力	4.62		2.31
12	笑顔で接して、表情豊かである	3.08	1.43	2.26
13	環境構成をする		4.29	2.15
14	積極的にかかわる	1.54	1.43	1.49
15	集団をまとめる	1.54	1.43	1.49
16	見守る力		2.86	1.43
17	自覚と責任を持つ		2.86	1.43
18	子どもの心を読み取る	1.54		0.77
19	援助、配慮をする力	1.54		0.77
20	教材研究、事前準備をする	1.54		0.77
21	子どもの心を引き出す	1.54		0.77
22	子どもの話を聞き取る力	1.54		0.77
23	最後までやりきる	1.54		0.77
24	次へのステップにする	1.54		0.77
25	広い視野を持つ	1.54		0.77
26	歌唱指導をする		1.43	0.72
27	全体的話し合いをする		1.43	0.72

るのである。

#### (6) 実習事後指導として

実習後の指導として、研究保育の振り返りと、今後の保育実習に繋げるためにも、保育の展開とはどのように進めるのかを学習する場にする。

制作をする事を研究保育のテーマにしていることが多い学生達でそれを取り上げる。

単に制作をするだけではなく、遊びながら、工夫し、楽しむことなのである。

遊べる制作物から、その遊びが保育室の壁面を飾り、子どもの遊んだ跡を残す。そこに、制作、遊び、壁面の作成と保育が進み、子どもの活動が深まり、保育の展開になる。

子どもにとって楽しいことであり、遊びの充実

を実感する。自然物で遊んだことが、それを使い作る喜びと、お話の世界へ広げていくこともできる。そのように意図した作品の壁面を教育実習資料集より抜粋する<sup>10</sup>。2人一組で作成したものである。

表5・表6・表7とは保育の展開を示し写真1)・写真2)・写真3)は出来上がった壁面である。

その他の学生の作品を写真4)～写真11)まで載せた。それぞれに保育の展開表はある。学生に配布し今後役に立ててほしいと思う。

表5) 保育の展開 (夏の海)

項目	内容
テーマ・時期	夏の海 7月
対象年齢	4歳児
使用した材料	画用紙・ボンド・トレー・磁石・割り箸・クリップ・タコ糸他
子どもの遊びの内容	魚を制作する 魚釣りをする 海に想像し描く
保育者のねらい	トレーで自分のイメージした魚を作る 素材に親しみ興味を持つ
自己評価 反省と課題	壁面を見ながら季節を感じる。日々の生活の中で、海の生き物に興味を持つようにすることができる。



写真1) 夏の海

表6) 保育の展開 (お祭り)

項目	内容
テーマ・時期	お祭り 夏
対象年齢	4、5歳児
使用した材料	卵パック・毛糸・新聞紙・画用紙他
子どもの遊びの内容	お祭りのイメージを持つ 新聞紙、色紙でタコ焼き、焼きそばを作り、お店屋さんごっこで遊ぶ
保育者のねらい	全員で楽しむ 廃材で作る楽しさを味わう
自己評価 反省と課題	もっと事前に用意をする 色合いをもう少し鮮やかにする 子どもの身近な物を作成したので遊びやすい。



写真2) お祭り

表7) 保育の展開 (秋の落ち葉拾い)

項目	内容
テーマ・時期	秋の落ち葉 11月
対象年齢	5歳児
使用した材料	折り紙・画用紙マジックペン
子どもの遊びの内容	遠足に行ったときの事を話し合う 拾った落ち葉を自由に画用紙に貼る イチョウの葉を折り紙で作る
保育者のねらい	秋の自然に触れ興味を持つ 感性を豊かにする
自己評価 反省と課題	壁面の地面、紙を丸めて地面の感じを出したのはよかった。 5歳児の子どもが制作する部分を多くしたほうが良い



写真3) 秋の落ち葉



写真4) 春の遠足 (ペープサートで遊ぶ)



写真7) アイスクリーム



写真5) 雨つづ



写真8) 七夕さま



写真6) 大きな朝顔



写真9) 松ぼっくりと狸、キツネの秋のおどり



写真10) クリスマス会



写真11) ひなまつり

#### 4. 教育実習（第一部2年生）

##### (1) 集大成としての実習

一部2年生の教育実習は、保育所観察実習・参加指導実習・施設実習・幼稚園観察実習等全ての実習を終え、実習の集大成となる実習である。

今までの経験を活かすことのできる最後の実習であるからこそ、より深い学びをしてほしいと考える。記録のとり方、指導案の作成などでは何度も躓き、苦勞したはずである。そのためこの実習ではそれ以上の学びをと思い、ねらいを、「保育の深さに触れるとともに、幼稚園教諭としての責任や喜びを体験することで、充実感を味わう」と設定した。

しかし、学生たちは「今回の実習で学ばせて頂きたいこと」の欄に対象の子どもは同じなの

に、幼稚園は教育といわれる。教育とは何か。また、それは保育園で行われていることと何が違うのか等、幼稚園と保育所の違いを学びたいという画一的なことを多く記入していた。ただ、今この時期になっても、幼稚園と保育所の違いについては明確な答えが出せないのが学生の現実の姿だと考える。

保育所と幼稚園の違いを言葉の理解だけではなく、幼稚園の保育を体験することから理解していく、それこそが大きな学びであると考えた。目に見える事実だけではなく、保育に向けた先生方の情熱（保育がうまくいかないことへの葛藤やジレンマ、日々努力を重ねること、喜び、充実感等々）まで感じることで、幼稚園教諭の全体像が明確になってくる。この時点で就職先を保育所、あるいは施設と考えている学生が多いが、幼稚園を深く知ること、幼稚園もいいなと感ずることが出来る、または、その違いを理解した上で、保育士の仕事に向けて専門性を発揮出来るようになってくれればと願う。

2年間の集大成としての実習に全力で取り組み、保育の真意を理解しようと努力することによって、保育の楽しさ・奥深さに気付き、自身を大きく成長させてくれることを願い、現場に送り出した。

3週間が終わった最初の授業、学生たちはざわざわとしていて、解放感に浸っている感を受けた。しかし私が前に立ち、一言発すると、学生たちはシーンと静かになり、話を聞いている。その真剣な表情に、何も語らなくても、実習が学生たちにとって大きな学びの場になったことが伺える。

##### (2) 3週間の成果（学生たちのレポートから）

学生たちのレポートから、3週間の成果を拾った。

レポートは、平成26年11月に91名を対象に実施。10項目のチェックリストと4項目の自由記述で実習の振り返りをした。



表8)

項 目		人数	%
子どもたちの名前を全部覚えることが出来た		87人	96%
出来なかった (クラスを代って 入ったため)	95%覚えた	1人	1%
	90%覚えた	1人	1%
	70%覚えた	2人	2%
先生という仕事の楽しさが分かった		91人	100%

全員が先生の仕事の楽しさが分かったと回答した。この回答は私にとって予想外で、嬉しく感じた。

それをどのような場面から感じる事が出来たかの問いについては表9)の通りである。

表9)

項 目	人数	%
子どもたちの成長が見られたとき(運動会等、行事の後)	16人	18%
子どもたちとともに共感し、喜び合えた時(ドングリ・葉っぱなどを拾って)	12人	13%
子どもたちと深くかわり子どもたちのことをよく理解出来たと感じた時	12人	13%
担当のクラスの子どもたちが共感し合う姿を見たとき	11人	12%
子どもたちが楽しそうに遊んでいる(歌ったり・制作したり・課題に取り組んでいる時)姿を見たとき	11人	12%
その子なりに満足できる作品が完成し、それを得意げに見せに来たとき、また認めてもらった時の表情を見た時	11人	12%
保育は奥が深く、すべて先生次第だと、やりがいを感じた	10人	11%
担任が一人なので子どもたちとの結びつきが強い	8人	9%

運動会や音楽会など大きな行事を体験し、日々の練習の大変さと共に、発表会当日の園児たちの誇らしげな様子に触れた学生が多く、子どもたちの成長を目の当たりに出来たことが、この回答の原因と感じた。

では逆に仕事の厳しさについての意識は

表10)

項 目	人数	%
幼稚園教諭の仕事の厳しさ、大変さが分かった	91人	100%

それをどのような場面から感じたのか

表11)

項 目	人数	%
毎日指導案を書き、翌日の準備をしなくてはいけない	31人	34%
子どもたちが主体的に活動できる保育を考えなくてはならない	13人	14%
一人一人を大切にしながら大勢を保育していかなければならない	12人	13%
一人担任の責任の重さ	11人	12%
保護者との関わり	8人	9%
子どもたちの育ちに合わせた保育を考える難しさ	8人	9%
少人数で行事を熟す	5人	5%
行事が多い	3人	3%

保育の中身にまでふれた回答が多くあったこと、学生の学びに嬉しい思いがした。

### (3) 記述回答からの抜粋

#### ① 今回の実習で嬉しかったこと

- ・ 日を重ねるごとに子どもたちと親密になれた。幼稚園児は手ごたえがあることに驚いた。
- ・ 失敗しても子どもたちが支えてくれた。担任の先生から、その理由として子どもたちとの関係が出来ているからと言われ、相手は小さい子どもだと思って見てはいけないと感じた。
- ・ わずか20分の研究保育のために、3時間も4時間もかけて準備して大変だった。しかし保育が終わって、子どもたちが「またしようね。」と言ってくれた時、しんどさが一度に消えて、すべて喜びに変わった。
- ・ 自由遊びの時、絵を描いたり、制作をした時も、常に子どもたちは全力で遊んでいて、自身が力を抜くなど出来ない状況だった。子どもってすごいと思った。
- ・ 運動会や音楽会の練習で、何度も何度もやり直

した。それでも力を抜かないで、一生懸命に頑張る姿に感動した。うまくできるようになったとき、思わず涙が出た。

## ②今回の実習で特に難しいと感じたこと

- ・子どもたちが意欲を持つような言葉かけが難しかった。もっと、語彙数を増やしたいと思った。
- ・担任の先生だとしっかり聞くのに、実習生の自分が話すと、言うことを聞かない子どもたちがいた。甘く見られているのかもしれないが、子どもの心に届くような言葉かけが出来ればと願う。
- ・指導案を書くのは難しいと思ったが、実際に保育することの方がはるかに難しいことが分かった。導入のしかた、ハプニングに対する臨機応変な対応、子どもの心をこちらに向けるための言葉かけ。何度も担任の先生に助けてもらって何とかやり果せた。先生ってすごいと思った。経験を重ね、自身も教わった先生のように、子どもに信頼される先生になりたい。
- ・指導案を書くときに知っている言葉が少なく、思ったことを文字に出来ない歯がゆさを感じた。

## ③今回の実習で特に勉強になったこと

- ・制作の時の準備物、配慮のしかた
- ・この時期の5歳児は、クラス全体での話し合いが出来るようになってくることを知った。
- ・保育者がどう援助すれば、話し合いが高まっていくのか、援助のしかたが学べた。
- ・先生が遊びの中心になるのではなく、傍で見て、適切な時期に言葉をかけるタイミングが学べた。
- ・毎日のように行事があり、大変だという思いがしたが、先生方は子どもたちが心待ちにするように期待を持たせていかれた。感動した。大きな学びだった。
- ・出来ないと諦めず、失敗を繰り返していたら、出来るようになってくることを身をもって知り、頑張ろうと思えた。
- ・運動会があれば、一日の全てが運動会のこと、

音楽会があれば毎日歌や合奏、制作展があれば毎日絵をかいたり、作ったりしている。けれど、先生は1年を通したらそれで均衡が取れているのだと言われた。それでも、子どもが少し可哀そうだと思った。

- ・教材研究をしっかりとっておけば、保育は何とかなることを学んだ。
- ・ねらいをしっかりと持って、子どもの前に立ち保育することが大切だと教わった。しかし、そのねらいを立てることがまた難しい。これからさらに学んでいきたい。
- ・先生の話し方—子どもが聞き入る話し方のテクニックがあるように思った。

## ④これからの課題

- ・子どもたちに合わせたピアノが弾けるように、もっと練習を重ねる。
- ・設定保育の時、子どもたちにわかりやすい言葉で話しかける。そのために子どもたちにわかる言葉を学んでいきたい。また、その場に合った言葉かけを学んでいきたい。
- ・子どもたちの内面（気持ち・思い）を知るために、一人一人をしっかりと見ることをしていきたい。
- ・日々の記録を、もっと充実したものにするために、語彙数を増やしたい。
- ・子どもたちにかける言葉をもっと豊富にしたい。絵を描くとき、けんかをしたとき、歌うとき、常に通り一遍の言葉しかかけられず、解決に繋がらない歯がゆさを感じた。子どもたちの心に響く、多くの言葉を学んでいきたいと思った。
- ・指導案を書くとき、思いはあってもそれを文章にするのが難しい。文章力のなさを実感した。これからの課題である。
- ・感じる心を養っていきたい。子どもの心の動きを感じる心、季節の移ろいに感動する心など。これから、色々なものを見て感動することで子どもたちの気持ちの変化にも気付いてやれる先生になれると思う。
- ・季節の移ろいを感じる感性を養っていきたい。

今まで当たり前だと思って、見過ごしていた景色を、子どもたちは心にとめ色々感じていることを知った。

#### (4) 課題からの分析

以上の回答は、正直、予想できないほど深い内容であった。ここまで深く子どもたちと関わり、保育の重要性を理解できている学生がいたとは想像できなかった。学生たちの学びがただ嬉しい。

3週間という長い期間であるために、子どもたちとの結びつきが強く、深くかかわることが出来た学生が多くあった。そのため子どもたちの成長した姿を実感し、喜びを感じる事が出来たようだ。子どもたちの成長を、自分のことのようにとらえ、心弾ませた学生の姿が感じられる。また、ひとつ意外だったことは、いつも学生から聞く「ピアノが出来ない」との反省は勿論多く見られたが、今回のレポートでは、それよりも、子どもにける言葉が一辺倒である、記録を書こうにも語彙数が少なすぎて思いが伝えられない、保育を進めていくためにもっと多くの言葉を自分のものにしたという回答が多くあった。これは保育そのものに苦戦した結果だと考える。学生たちのレポートから、今後の教育実習の中に、言葉の学びを組み込んでいきたいと考えた。学生たちは豊かな感性で周囲を見て、それぞれに感じている。しかし語彙数が少ないために、その感動を人に（子どもたちに）伝えきれないという事実も見えてきた。語彙数の問題は就学以来の長い期間の課題ではあるが、今後、実習の注意事項をきちんと伝え、書類を準備することと共に、子どもたちの豊かに感じる心に対峙できるように学生の語彙数を増やしていく努力を重ねていきたいと考えている。

### 3. おわりに

実習を終えた時点で、学生の気持ちや思いに大きな揺れが生じることがある。⑦自分は保育士に向いていないと感じる。⑧保育士になりたい希望はあるが自信が持てない。⑨課題が山ほど見つかったがとにかくやってみみたい等々の声が聴かれる。

実習先のご厚意により、学生の良さを認めてくださったことや「社会に出るとこれくらいの厳しさでは済まないよ」との思いで厳しくも温かく指導して下さった指導者への感謝の気持ちを学生が持ち合わせたことまた、子どもの歓声に励まされたり、元気をもらったり、した経験ができたことは、何よりの成果である。学生たちの人格形成の拡充が図られた思いである。冒頭で危惧した、保育者を目指すマインドを持つこと、保育者としての主体性を持つこと、保育者としての専門性を身につけること、子どもへの気づきや、その表現方法等も多少は身についたと確信できる。それらは学生自身の努力の積み重ねでもある。しかし、学生をつまづきや悩みを見聞きすると、もう少し視野を広げ応用力が付くように望む。これまでの学びを駆使すると色々なアイデアが広がったり、意欲が高まったりして具体的な考えが出てくるように思う。現時点では実習＝実習指導という構図に縛られているようにも思う。つまり、実習指導だけが実習に必要な科目ではなく、他の科目も実習と関連していることに気づくようになってほしい。例えば、保育とはどのようなことか、保育所の役割や機能はどのようになっているのか、ということについては保育原理で学んでいる。また子どもを理解するための子どもの心理学や子どもの保健等も実習と深く関わっている。更に保育内容に関する各科目では具体的な遊び方や環境の作り方等々も学習している。その他の科目も同様である。どの科目も実習に必要な不可欠な科目であることを意識し、実習にそれらを取り込んでいくようになってほしいと願う。

一方保育者としての資質向上については、実習を経験して自分には保育者としての資質に欠けると感じた学生も残念ながら数名いる。事後指導で個々の課題を鮮明にしながら資質に欠けるかどうかと結論付けることは難しいことであるが、最後は本人の意思によるものと考えられる。また、資質をさらに向上させるのは保育現場に就職してから先輩保育士の指導によるものも大きく、そこに期待したい。当初、学生が実習先を各自が選び地域で実習することにしてはいるのは、単に居住地から近

いというだけの理由ではなく、地域のセンター的な役割を果たす保育所(園)や幼稚園で地域の人々との連携を密にしながら地域に根差した保育者養成にも着目してのことである。今年度も実習先の幼稚園・保育所で求人があり、就職することができた学生も多数いる。実習での経験を今後に生かし、保育者としての資質向上に励んでほしいと祈念する。

#### 引用文献

- 1) 平成15年12月9日 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設及び運営の基準について」別紙2「保育実習実施基準」〔第1 保育実習の目的〕厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設及び運営の基準について」
- 2) 國光みどり著「近畿大学豊岡短期大学論集第6号(2009)」p34
- 3) 百瀬ユカリ著「よくわかる保育所実習」創成社 p12-14
- 4) 栗原ひとみ著「暁星論叢第64号(2014)」p4
- 5) 山本和美著「保育方法論」樹村房 p11
- 6) 幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価 平成4年10月 p5
- 7) 奥山順子・山名裕子著「秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第28号(2006)」p120
- 8) 広岡キミエ著「心を開く幼児教育」p88
- 9) 玉置哲淳・島田ミチコ監修、大方美香・瀧川光治・中橋美穂・ト田信一郎編集「幼稚園教育実習」建帛社(2013) p2

#### 参考文献

- 10) 三井圭子・保育科第三部3年生編集「平成25年度教育実習資料集～子どもが楽しんだ作品で壁面を作ろう～」